

10月12日(火) 「個性を大事にすべき」という考えに問題はあるのか

作成者：想田 瑞恵

檜垣先生(以下H):「個性を大事にしよう」と考えることが諸悪の根源ではないかという考えに、週末のいくつかの集まりを通じて到るようになりました。ソクラティックダイアログと言って、ソクラテスの問答法をルール化して現代に応用しようとする試みがあるんだけど、授業で使われるほか、生命倫理を検討する場や企業のミーティングなどでも導入され、ビジネスにもなっているようです。また、フランスのオスカル・ブルニフィエが考案した「相互問答法」という、対決が苦手な人にも参加しやすいように質問のみを繰り返して理解を深めてゆく対話型授業の手法については、実際に模擬授業を受けてきました。そのほか「徳は教えられるか」ということを考える主題別討議にも参加しました。僕も意見を述べたので、その後の懇親会は会費が高めだったんだけど、反応があるかもしれないと思って参加しました。やはり参加して正解でしたね。発言することによって、意見がかえってきて、話が始まる。発言してよかったと思いました。

想田(以下S):その「個性を大事にすることが諸悪の根源」という考え方は、どうもなじめなくてですね。

H:個性が大事にされている状態はいいんですよ。「個性を大事にしよう」と考えることが問題だと思いますね。

S:「個性を大事にしよう」と考えることが問題」というのも、抵抗があります。おそらく風潮は私の考えに近いでしょう。また、ゆとり教育のせいにするようですが、その世代の人なら何かしらの抵抗感はあるのではないのでしょうか。そう感じるのが私だけだったらどうしようと思うので、まあその場合でも先生の意見には反対しますが、他の方がどう思っているのかお聞きしたいです。

栗原さん(以下K):風潮としては確かにそうですね。ただ僕は自分の実体験から、個性重視には疑問を感じているので、先生の考えには抵抗がないですし、むしろ賛成します。僕はずっと「個性がないと価値が無い」というように感じていて、それが辛かったですよ。中学のときは、ひたすら、勉強とか音楽などで、人と違うところを作ろうとしました。個性がない人間には価値が無いから、自分の個性として、優等生を演じたり、かっこつけたりしてました。そういう個性を演出しようとする癖は、なくしたいと思っているんだけど、ずっとやってきているものだから、なかなかなくせないでいます。個性がないと目立たないし、劣等感を覚えてしまう。しかも、誰にでも個性はあると押し付けてくる。そうしたことに疑問を感じていたので、先生の考えに面食らうということはなかったですね。ヴィトゲンシュタインも「個性がない人は自殺すべきだ」というような言い方をしていましたが、生きるに値するかどうかは才能の有無、個性の有無というのはおかしいと思います。

H:ヴィトゲンシュタインがそんなことを言っていたんですか。

K：正確には覚えていませんが、確か、その頃の風潮的にもそうだったはずです。名前は忘れましたが「天才でない人間は自殺すべきだ」といった人が、彼が天才だと思っていたベートーベンの住居で本当に自殺したんですね。それでその考えが一気にブームになったみたいです。ヴィトゲンシュタインのお兄さんもそれに乗って自殺したらしいですね。ヴィトゲンシュタイン自身も、第一次世界大戦のときは、別に死んでもかまわない、とっていたようですし。その時代は「個性」という言い方ではなかったですが、今のそれと似ていると思いますね。

H：「他の者よりぬきんでていないといけない」というところですね。でも、日本の場合は、さらに、「みんなオンリーワン」だと言う。それ苦しいですよ。人と比較できないのどうしろというのか。

K：そこで、個性に優劣をつけているのかもしれないですね。たとえば、運動が得意という個性と、電車の路線図を覚えるのが得意という個性と、前者のほうがもてる、価値があるというような。

H：そう、しっかり差別化しているんですよ。「最近の学生は、覇気がなくて競い合うことをしなくなった」と言う人たちがわかってないんじゃないかなと思うのはそのあたりですね。同調圧力によって口を閉ざす気が弱い学生、というより、確かに思想を人にぶつける勇気はないのだけれど、強い自我（プライド）を彼らは持っているんです。ただ週末はそここのところを強調しすぎて、へんな人だと思われたみたいですね。「そんなに学生は自我が強いですかねえ」って。そうじゃないんですよ。教師が想定する自我とは違うんです。永延さんは、どう思いましたか。

永延さん：個性を持つべきとするのが、学校教育の方向というのはそのとおりでしょう。ただそのやり方が中途半端だと思います。個性を持つべきとしておきながら、「みんなと同じにする」ということも言っている。私立の学校に通っていた友人の話を見ると、個性を重視するのも本当に楽しそうなんですけどね。

H：今のはいいですね。個性が他人に向かわず内向きになることの理由を論理的に示していたと思います。対立しないようにすると、閉じた個性になるしかなく、若者が悪いのではないのでしょうか。増田さんは、どう思いましたか。

増田さん（以下M）：个性的であることに反対するのは、感覚としてありますね。昔、「世界に一つだけの花」が流行ったときも嫌な気分になりましたし。

H：それすごいですね。僕は当時良い歌だなあと思って聞いていましたよ。

M：ただ想田さんにちょっと確認したいことがあって、やさしい人間関係では駄目だと思って、今度は全部の関係を対話でやろうとしていませんか？それだから辛い、というように見えるのですが。

S：そうではないと思います。そこは増田さんの以前の指摘で気が付いたのですが、やさしい人間関係を脱しようとして対話を試みても、「自己肯定感を得るため」のように、話題よりも自分自身のほうに興味があり、結局対話になっていませんでした。つまり、必ずや

さしい人間関係がベースにあって、その上で対話らしきものをしていたわけです。このことから、やさしい人間関係や対話が選択肢になっている状態、自覚的に裏表を使い分け、能動的にやさしい人間関係を行う状態になれば、それでいいのだ、とはわかっていると思います。

M：やさしい人間関係を排除しない、ということならいいのですが...

H：でも、そうした「対話もやさしい人間関係も選択肢になっている状態」には到れない、と考えているのですね？

S：ええ、そうです。どうしてもやさしい人間関係はベースになってしまうと思います。なので、それを洗練させる方向、具体的には共通の目的の設定により関係を作るということをしていけたら、と考えています。

H：対話も選択肢にある状態ってそんなに難しいですかね。やはり、個性とは何かと考えてみたほうがいいですね。週末にも話が出ましたが、本当の意味での個性は、神を信じていないと出てこない、神によって保証されるしかないものなんですよ。ギリシア哲学には、理性を重視することは出てきても、個を重視するという発想は出てこないでしょう。「個に価値がある」という考えは、キリスト教が誕生してからなんです。

S：ですが、やはり個性は必要だし大切なものではないのですか？個性ということで、自分の可能性、自分が変わる可能性を考えることもあるでしょう。自分のかけがえのなさを理解しようと思ったら、どうしても個性のようなものが必要になると思うのですが。

H：「自分が変わる可能性」ということならいいでしょう。ただ、かけがえなさについては、考える必要があると思いますね。普段の何気ない日常の中で、ふとかけがえのない存在を感じることはあるかもしれませんが、科学的に証明できるものではありません。その意味で、(宗教の裏づけのない)かけがえのなさとは空虚なものなんです。

S：空虚だからこそ、個性という内容が求められるのではないですか。

H：そこに矛盾が生じるのだと思いますね。かけがえのなさに内容はあってはいけません。(我々人間に捕らえられる内容とは、取替え可能なものにすぎないですから)。個の尊重を保証するには、やはり絶対的なものが必要でしょう。小林よしのりも昔は「自立した個の連帯」ということを言っていたけど、薬害エイズの事件で学生と関わって、これじゃだめだと、イデオロギー的には右翼になっていますね。宮台真司も、神がいないと駄目だろうということは言っていて、日本なら天皇制の復活だろうと主張していますね。最近はカルチャー方向に行ったみたいですが。「他者とのつながり」ということを考えたとき、本当に天皇制の復活しかないと思いますか。

S：共通の目的を設定してつながる、ということをつきつめるなら、そういうことになるでしょうね。ただもう少しソフトに、「天皇を支持するために関係を作る・維持する」くらいがいいとは思いますが。

H：個を大事にすることはどういうことなのか、考えてみるべきでしょうね。まず、「個を大事にすることと共同体を大事にすること」という二項対立には、今ねじれがあるでしょう。

そしてさらに「個を大事にすること」という考えにも、若者との間で、ねじれがあるように思いますね。個も問題だけれど、自由も考えなければいけない問題でね。「そうしないこともできる自由」というのでは駄目ではないかと、最近思うようになっていきます。それについては、以前いいことを言っていた学生さんがいましたね。入学式で自己決定ということと言われて、「自己決定という言葉が嫌いです。そんなことを言われなくてもやるべきことはやるのに、脅されてる気がする」という話でした。いいなと思って、次に取り上げようとしたら、彼女来なかったんですけどね。自己決定は、選択肢があるとかないとか、そういうのではなく、「みずからが責任をもってやる」という意味くらいにすべきではないかと思っています。選択肢があったかどうかは、それほどは重要な問題ではないんですね。ましてや、教師や世間に向かってゆく勇気もなしに、その庇護のもとで、「あれもやってほしい、これもやってほしい」と要求するというのは、甘えた、いわばお子様の自由ではないかということですね。

### 演習にて

H：日本における道德教育について考える場が、週末にありまして、共同体も衰え、宗教教育も望めないこの日本でどうするかということについて、僕も賛同した考えがあります。それは、対話によって理性に訴えかけるしかない、ということですね。一番成果が見えにくいですし、西洋でもできていないことをこの日本で、ということもありますが、それしかないだろうと考えています。そして、そうした理性に訴えかける道德ということなら、カントだろうということ、『道德形而上学の基礎付け』講読との関連も確認できました。

### まとめ

#### 個性を重視する学校教育が中途半端だという永延さんの指摘と、先生の返答について

「個性を持つ」と「みんなと同じにすることを言う」を、二項対立的に捉えており、この矛盾を解消するためには、若者は、個性を対立ではなく閉じた形で表現するしかなかった、ということだと理解しました。ですが、私には、両者は二項対立ではなく同じことを言っているように思えるのです。「みんなと同じように」という言葉は、「上から目線を嫌う」という意味で、教師よりもむしろ若者のほうが多用しているのではないのでしょうか。

「みんなと同じように」は、「誰もがみんな、オンリーワン（特別）であり、対戦相手なきゆえのナンバーワンである」ということを前提に、「勝手に私の対戦相手になろうとするな」、つまり、「私と対立しようとするな」という牽制であり、「私のことを特別な存在だと認めろ」という要求だと思います。ゆえに、「個性を持つ」と「みんなと同じにすることを言う」は、矛盾するどころか、自分が個性を持つと主張する人は、それを確かめるためにやさしい人間関係を築くことで、必ず、「みんなと同じように」とも主張するはずで

したがって、もし、本当に「個性を持つ」ことと対比して「みんなと同じにすることを言う」としたら、それは対話側の主張になるのではないのでしょうか。そうした私の特別さ

の基盤である個性を否定し、合意を目指すわけですから。ここで特別さとは、自分をえこひいきする根拠であり、そうしたものとして「かけがえのなさ」を捉えています。個性は、自分がかげがえのない価値を持つことを証明するアイテムなわけです。何の根拠もないなら、自分で自分をえこひいき（特別扱い）したり、かけがえのない価値を感じたりすることがなぜ起こるのか。やはりどこかで人と違う自分、個性のようなものを信じていなければならぬと思います。